

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01203

研究課題名（和文）ライフ/デス・アートの美学

研究課題名（英文）The Aesthetics of Life/Death Art

研究代表者

前川 修（Maekawa, Osamu）

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号：20300254

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アート/テクノロジーと生/死が結び結ぶ新たな美学的可能性を提起することである。グローバリゼーションが進むなかで全面化している「生政治/死政治」（フーコー/ンベンベ）、これに抗するアート実践のひとつとしてバイオアートがある。これを、生命全般や生活世界に根ざした生命活動と結びつく「ライフ・アート」へと拡張し、さらにこれに対となる「デス・アート」を加え、両者を系譜学的に考察し、さらに現在の生命科学と現代哲学における生/死の境界の揺動をめぐる議論から照射することで、ライフ・アート/デス・アートの理論的言説と系譜学的考察を総合し、アートの現在の可能性を議論するプラットフォームを形成する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科研の学術的、社会的意義は、第一に、ライフ・アートという今後アート・ワールドで前景化する問題圏を考察する先駆的な理論的プラットフォームを形成することにある。第二に、一面で開かれているように見えるものの市場化されにくさという点で、資本主義の中に閉ざしたままのグローバル・アートの閉域を、「生/生命/生活（ライフ）」世界の観点から外へ開く視点を提起することがある。第三に美学芸術学という人文系の研究をその領域外（生命科学など）と折衝させるための新たな文理融合的な議論の場の契機になる点がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to propose new aesthetic possibilities that link art/technology and life/death. Bio art is one of the art practices that oppose biopolitics/death politics (Foucault/Nbembe), which are becoming more prevalent as globalization progresses. We expand bio art into life art that is linked to life in general and life activities rooted in the living world, adding death art to this, and genealogically examining both. By synthesizing the theoretical discourses and genealogical considerations of life art/death art, we plan to form a platform to discuss contemporaneous possibilities of art.

研究分野：美学・感性学

キーワード：ライフ デス アート 美学

1. 研究開始当初の背景

様々な国際的メディア・アートのフェスティバルにおいて「ライフ・アート」そして「アーティフィシャル・インテリジェンス(人工知能)」というカテゴリーが前景化しつつある。この新たなカテゴリーの登場は、芸術の実践・理論双方における20世紀末以来の劇的な変化を受けている。つまり、「ライフ(生/生命/生物)」と「アート(芸術/技術)」という二つの概念が交わり合い、生命科学と人工知能研究を基盤にして私たちの生活世界の中に目に見えない形で浸透しつつある環境、それをライフとアートの折衝を焦点として芸術において批判的に顕在化させることが、焦点になっているのである。

しかし、こうした芸術の動向は、現在のグローバリゼーションの進むアート・ワールドでは、目新しいトピックとして注目されるものの、理論的言説も歴史的・系譜学的考察も乏しい。もちろん、バイオアートと呼ばれる実践には、戦前の萌芽(エドワード・スタイケンによる植物交配実験とアートとしての展示等)、間を置いて1970-80年代の初期バイオアート実践(分子生物学の発展を背景にした芸術)、2001年以降のコンピュータを介したウェットウェア(生物)とドライウェア(機械)の間のフィードバック・ループを前提にしたアートという段階を経て現在に至っている。さらに現在、バイオテクノロジー自体が、「DIYバイオ」という自宅での遺伝子組換え実践、あるいは遺伝子検査キットの普及によって日常化し、それが社会的、倫理的な問題として焦眉の対象にもなっている。冒頭のライフ・アートという語はこうした現状も前提にしている。

本研究課題では、従来バイオアートと称していたものを「ライフ・アート」として捉え直し、さらにライフと対になるデス(死)を冠して「ライフ/デス・アート」という枠組みを設定する。これまでの人文学的視座からのアートの言説を組み直し、その一契機として生命科学の研究を参照するためには、たんにライフのみでは不十分であると思われたからである。

ライフ/デス・アートというカテゴリー設定の意図は次の4つである。

第一にライフ/デス・アートという概念は、ボリス・グロイスが『アート・パワー』(2013年)で述べたように、現在の技術を介した生の統御、生権力による生政治(フォーコー)そして「死政治」(ンベンベ)に抗し、それを問題化するような、生と死を焦点にした芸術(グロイスはこれをバイオアートと呼ぶ)にアートの考察の射程を広げることができる。

第二に、ライフ/デス・アートという概念は、狭義のバイオテクノロジーと広義のバイオテクノロジー(微生物を用いた醸造・発酵実践まで含む)を繋ぎ合せることができる。これは研究分担者岩崎がすでに人工細胞(人工生命)の慰霊碑というプロジェクトで実践した問題—アートにおけるライフ(生/生命/生物)の現在的意味を拡張するという問題—を引き受けている。つまりそれは、ジョルジョ・アガンベンが提起した「ピオス/ゾーエ」という生を表現する語の双方を含むことにもなる。現在の生政治が前提にするゾーエ(剥き出しの生)は、人間の生死のみならず、微生物や細菌などすべての生死を含んでいるからである。

第三に、生物、組織、遺伝子というライフを媒体(メディア)にしたアートは、現在

のアートの一元的パラダイムを超える枠組みを提供する。ニュー・メディアのアート言説も、旧来のメディアの可能性を考古学的に再考するポストメディアのアート言説も（R・クラウス）も、新／旧の一元的時間軸を設定している。だがバイオアートのメディアはこうした時間軸を揺るがすような媒質となる。例えばライフ・アートで頻繁に使用される大腸菌は地球上最古の生物のひとつであるが、他方で短期間に迅速な変異を遂げもする。こうしたメディアはこれまでの時間軸の線型的図式を壊乱してしまふ「メディア」なのであり、これを考察する枠組みを考えることでアートの言説を組み替えることにも繋がる。

第四に、現在の生物学の進展を基礎にしたアートにおいて、生死の境界が揺るがせられている。例えば、バイオアートでしばしば使用される、約30億年前に誕生したシアノバクテリアのように、その「生命」活動は一時停止することも再開されることもある。ここでは生死の境界は曖昧である。そしてそもそも細胞自体はいつも代謝を行うと同時に複数の死を迎えている。逆に、例えばHela（ヒーラ）細胞を用いたバイオアート作品は原理的には不死である。生命の定義の境界線上にアプローチするこうしたアート、生命／死の脱境界化、死の生への反転という問題を契機に、生命への文化的理解を押し広げることにもできる。それは生政治の技術の検討では不可視になっている死を、再度、生の中に取り込む実践・思考になる。

こうした考察を行うには、生／死のテクノロジーとしてのアートを、まずは近代以前／近代以後／脱近代という系譜学的枠組みから捉え、比較検討する必要がある。これまでの芸術の多くは、死を形象化するある種の人類学的テクノロジーでもあった。近代において死が生活世界から排除されたという批判が常套句ならば、その前後（前近代と脱近代）の実践、ライフ／デス・アートが持つ過去と未来の作用圏を付き合い合わせ、現在の生／死の技法であるライフ／デス・アートの方向性を、歴史的に厚みある形で議論することができるだろう。以上のように、ライフ／デスという理論的な生命（死の）概念の哲学的検討を行い、ライフ・アートの生活世界や過去との接触点を探り、ライフ／デス・アートの過去の系譜学的考察を行い、最終的にこうした3つの観点とアート／テクノロジーの可能性を突き合わせ、現在の美学の可能性を明らかにすること、これが本研究の基本的問いである。

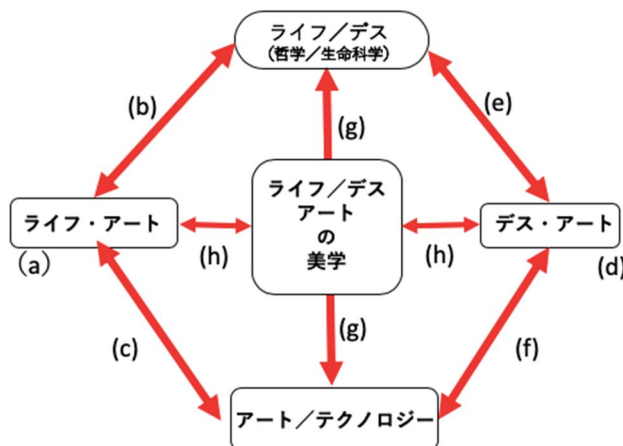
2．研究の目的

本研究の目的は、アート（／テクノロジー）と生／死が結びつく新たな美学的可能性を提起することである。グローバル化が進むなかで全面化している「生政治／死政治」（ミシェル・フーコー／アキユ・ンベンベ）、これに抗するアート実践のひとつとしてバイオアートがある。このバイオアートを、生命全般や生活世界に根ざした生命活動と結びつけた「ライフ・アート」へと拡張し、さらに、これに対となる「死のアート（デス・アート）」を加え、両者を系譜学的に考察し、さらに現在の生命科学と現代哲学における生／死の境界の揺動をめぐる議論から照射することで、ライフ・アート／デス・アートの理論的言説と系譜学的考察を総合し、アートの現在の可能性を議論するプラットフォームを形成する。

3．研究の方法

本研究は8名の研究者でおこなわれる。ライフ・アート班、デス・アート班、ライフ

／デス班、アート／テクノロジー班の4チームが、前近代／近代／脱近代の系譜を基礎にしながら、それぞれ理論・現象面の二側面から言説・事例の集積・意見交換を行う。次に、下図の左側(a)(b)(c)と右側(d)(e)(f)各々の統合を経て、最後に、中央軸にあるライフ／デスとアート／テクノロジーの意見交換を行うと同時に、左右にあるライフ・アート、デス・アートの事例をもとに収斂させる(g)(h)。4つのチームはつねに他チームと連動しながら作業を進める。必要な事例調査やインタビューのための視察は各自で行う。毎年、小中規模2回の研究会を設定し、最終年度には総括的な研究会を行う。



4. 研究成果

初年度はライフ・アートに強調点を置き、ライフ・アートの系譜整理とライフ概念の拡張（ライフ／デス班）、前近代／近代のデス・アートの系譜及び概念整理（デス・アート班）、デス・アートを製作する作家へのインタビュー（アート／テクノロジー班）の検討を行い、チーム間で連携した。

次年度はデス・アートの理論研究・事例研究に強調点を置き、第一に、ライフ／デス班はデス概念の哲学的言説を整理し、デス・アート班は近代／脱近代のデス・アートの系譜を整理し、同時にライフ／デス班と討議を行う研究会を開催した。第二に、アート／テクノロジー班は生政治をめぐる作品を制作する作家にインタビューし、ライフ／デス班がこれを受けて生政治概念とライフ概念の拡張について討議を行った。

最終年度には、これまでの討議をもとに4つのチームの討議を収斂させていった。デス・アート班の理論的成果を、ライフ／デス班を中継にしながら統合する作業を行った。年度後半にはこれに前年度までのライフ・アート班とデス・アート班との理論的共同作業をもとに統合作業を行い、さらにライフ／デス班との間で、ライフ／デス・アートの美学の可能性を討議した。最終報告会を含めた論稿集は、ウェブサイトにて2023年度前半に公開予定である。

.....

以下には2020年度から研究会の成果を順番に挙げていく。なお、科研メンバーが関わった日本記号学会の場でも本科研に関連したパネルを構成した。

初年度

- ・2020年度第1回研究会（2020年11月22日）研究目的と研究方法、今後の予定の確認。
- ・2020年度第2回研究会（2021年1月23日）
 - 加須屋誠「死について語るときに私が語ること」
 - 前川修「タナトロジー／タナトポリティクス／ネクロロジー」
- ・2020年度第3回研究会（2021年2月27日）
 - 岩城覚久「生命と感性 異種間(?)インタラクティブ・アート論に向けて」
 - 岩崎秀雄「aPrayer:人工細胞の慰霊 ～『生命をつくる』とはなにを意味するのか」

次年度

- 2021 年度第 4 回研究会 (2021 年 5 月 30 日)
増田展大「ポストヒューマンから動物へ その生と死について」
松谷容作「《土をつくる》(2021)におけるライフ/デス」
- 2021 年度第 5 回研究会 (2021 年 9 月 5 日)
水野勝仁「インターネットアートを通して、何か新しいものに再接続する試み」
大橋完太郎「死と喪、およびそれをめぐる文化と表象についての現代思想・哲学」
- 2021 年 11 月 27-28 日 日本記号学会第 41 回大会
「自然と文化のあいだ 「生命」を問いなおす vol.2」会場：九州大学・大橋キャンパス
- 2021 年度第 6 回研究会 (2022 年 3 月 22 日)
加須屋誠「仏教的宇宙観と身心観 構造とその崩壊」
前川修「没後写真論 スズコラ『写真の複数の死』を読む」

最終年度

- 2022 年度第 7 回研究会 (2022 年 5 月 22 日)
岩城覚久「モアザンヒューマンエスティクスと動物とのコ・デザインに向けて」
岩崎秀雄「人工知能と音楽の生命性：「aPrayer 3.0〜まだ見ぬ人工知能の慰霊」「Culturing <0/Paper>cut」に関して」
- 2022 年度第 8 回研究会 (2022 年 7 月 31 日)
増田展大「人類学とライフアートの邂逅にむけて」
松谷容作「重ね合わされる時間：ライフ/デス・メディアとしての映像」
- 2022 年 9 月 17-18 日会場：追手門学院大学・総持寺キャンパス
「記号論の行方 モビリティ・人新世・ケア」
- 2022 年度第 9 回研究会 (2022 年 10 月 2 日)
水野勝仁「紀要論文に書けなかった山形一生インタビューにおける「生と死」を振り返る」
大橋完太郎「再生・生・性」
- 2022 年度第 10 回研究会 (2023 年 3 月 25 日)
前川修「ヴァイタルサインとしての写真」
増田展大「ライフアートの美学と生態学」
松谷容作「物質循環とイメージ循環」岩城覚久「体外離脱体験の感性論に向けて」
水野勝仁「私たちに残された行為はただ一つ、ゲーム機本体の電源を落とすことである。」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Osamu Maekawa	4. 巻 4
2. 論文標題 Thinking Ghost Photography	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue internationale de Photolitterature	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前川修	4. 巻 106
2. 論文標題 コロナの写真映像	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18917/eizogaku.106.0_25	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩崎秀雄	4. 巻 11
2. 論文標題 時間軸の代謝：「人工細胞と人工知能の慰霊」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代生命哲学研究	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamamoto Hiroki, Fukasawa Yuki, Shoji Yu, Hisamoto Shumpei, Kikuchi Tomohiro, Takamatsu Atsuko, Iwasaki Hideo	4. 巻 21
2. 論文標題 Scattered migrating colony formation in the filamentous cyanobacterium, Pseudanabaena sp. NIES-4403	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Microbiology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12866-021-02183-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 60
2. 論文標題 土とアート - - 三原聡一郎《土をつくる》をめぐる一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院大學紀要	6. 最初と最後の頁 71-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiro Masuda, Juppo Yokokawa, Kazuhiro Jo, Yosaku Matsutani	4. 巻 6
2. 論文標題 Living Images, Inert Humans: Vitality of the Images Appearing in Chromatophony and A Wave	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The proceedings of The Sixth Transdisciplinary Imaging Conference: Dark Eden	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.6084/m9.figshare.16993312.v2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 水野勝仁	4. 巻 107
2. 論文標題 「認知者」としての作品 エキソニモのUN-DEAD-LINK展を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 18-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 29
2. 論文標題 創造から発明へ カンギレムとシモンドンにおける技術論の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juppo Yokokawa, Nobuhiro Masuda, Kazuhiro Jo	4. 巻 55:03
2. 論文標題 Chromatophony: A Potential Application of Living Images in the Pixel Era	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Leonardo	6. 最初と最後の頁 252-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1162/leon_a_02107	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iwasaki Hideo	4. 巻 25
2. 論文標題 Culturing & Paper & cut	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Performance Research	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13528165.2020.1807763	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kawamoto Naohiro, Ito Hiroshi, Tokuda Isao T., Iwasaki Hideo	4. 巻 11
2. 論文標題 Damped circadian oscillation in the absence of KaiA in Synechococcus	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nature Communications	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41467-020-16087-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kirie Shiryu, Iwasaki Hideo, Noshita Koji, Iwata Hiroyoshi	4. 巻 15
2. 論文標題 A theoretical morphological model for quantitative description of the three-dimensional floral morphology in water lily (Nymphaea)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0239781	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kirie Shiryu, Iwasaki Hideo, Noshita Koji, Iwata Hiroyoshi	4. 巻 15
2. 論文標題 A theoretical morphological model for quantitative description of the three-dimensional floral morphology in water lily (Nymphaea)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0239781	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 -
2. 論文標題 人の動きを観ること、制御すること、撮ること 1980年代の子供とジャッキー・チェンの関係から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KYOTO EXPERIMENT magazine	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田 展大	4. 巻 33
2. 論文標題 メディアの物質性をめぐる試論 : 写真とデザインが交差するところ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 芸術工学研究	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4113196	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大橋完太郎	4. 巻 12
2. 論文標題 批評の消息 : 消極的合法性からの脱出	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エクリヤ	6. 最初と最後の頁 234-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大橋完太郎	4. 巻 48-14
2. 論文標題 大学の「身体」は変容する : COVID-19流行以降の状況から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大橋完太郎	4. 巻 52-15
2. 論文標題 偽書の思想史 : ルネサンスからポストモダンまで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kantaro OHASHI	4. 巻 1
2. 論文標題 L' enjeu philosophique de la pauvreté chez Diderot	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人間技術と文化に関する国際共同研究 International Studies on Human Technology and Cultures』	6. 最初と最後の頁 82-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 16件)

1. 発表者名 Hideo Iwasaki
2. 発表標題 Bioaesthetics for simultaneous performance of biological studies and art practice
3. 学会等名 BioClub & Biohack Academy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hideo Iwasaki
2. 発表標題 On an introduction to aPrayer project
3. 学会等名 BioSummit 5.0 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 アウトリーチではないバイオ(メディア)アートの勤め
3. 学会等名 日本動物行動学会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 Biogenic Timestampを巡る時間論
3. 学会等名 日本時間学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Mimesis and Environment on the Posthuman Condition in the Recent Art Works of Soichiro Mihara
3. 学会等名 POSTHUMAN MIMESIS: EMBODIMENT, AFFECT, CONTAGION (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Becoming Static: Experiences of Pathe Baby Before The Second World War in Japan
3. 学会等名 4th International Conference - Stereo & Immersive Media (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Making Soil
3. 学会等名 4th Renewable Futures Conference 2021 FeLT Futures of Living Technologies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani, Soichiro Mihara,
2. 発表標題 An Infinite Cycle of Life and Death in Making Soil
3. 学会等名 Art and Critical Ecologies: Multiscalar Engagements (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大橋完太郎
2. 発表標題 個の救済とポップなものの哲学
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda, Kazuhiro Jo
2. 発表標題 Who is the Biohacker?: Its Historical Position
3. 学会等名 BioClub Lecture/BioHack Academy 2022 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda
2. 発表標題 Transductive Media for Multispecies Aesthetics
3. 学会等名 4th Renewable Futures Conference 2021 FeLT Futures of Living Technologies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 生命をめぐる分類思考の回帰
3. 学会等名 九州大学哲学会シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 生命の創造と慰霊の関係性を巡って
3. 学会等名 シンポジウム「いのちと技術」、JST RISTEX&帝京大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 生命美学の試み：生物時計から人工細胞の慰霊まで
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 生命美学：科学者が科学以外の表現方法を持つこと
3. 学会等名 東京大学Kavliファンダメンタルズトーク
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎秀雄
2. 発表標題 バイオアートについて
3. 学会等名 JST RISTEX「社会実験」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iwasaki Hideo
2. 発表標題 Bio-related art practice to live in Klein bottle-like structure
3. 学会等名 Proc. EIH Symposium (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iwasaki Hideo
2. 発表標題 Art for living in Klein bottle
3. 学会等名 Berlin-Tokyo Viral Cloud Meeting (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iwasaki Hideo
2. 発表標題 About metaPhorest platform
3. 学会等名 Berlin-Tokyo Viral Cloud Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩城寛久
2. 発表標題 異種間インタラクティブアートの可能性
3. 学会等名 アート×サイエンス IN 京都市動物園 「アートで感じる？ チンパンジーの気持ちアート×サイエンス IN 京都市動物園」トークセッション
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Just an image?
3. 学会等名 The Sixth International Conference on Transdisciplinary Imaging at the Intersections between Art, Science and Culture DARK EDEN (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Aesthetic Techniques Without Technology: Soichiro Mihara's "[blanc] project"
3. 学会等名 The fourth international conference "Taboo - Transgression - Transcendence in Art & Science" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 科学認識論における技術論の系譜 その応用の可能性を巡って
3. 学会等名 西日本哲学会第71回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Juppo Yokokawa, Nobuhiro Masuda, Kazuhiro Jo
2. 発表標題 Living Image: squid chromatophore as an alternative pixel
3. 学会等名 4th International Conference "Taboo - Transgression & Science; Transcendence in Art & Science" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda
2. 発表標題 Taxonomy of Posthuman Anthropomorphism in Science and Art: From Animal to Machine
3. 学会等名 4th International Conference "Taboo - Transgression & Science; Transcendence in Art & Science" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 分解と発酵をめぐるメディア論 メディア（生態学）の発酵のために
3. 学会等名 日本記号学会第40回大会シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuhiro Masuda
2. 発表標題 Technological Conditions for Living Images” (the Panel 'Living Images, Inert Humans')
3. 学会等名 Dark Eden, The 6th international Conference on Transdisciplinary Imaging at the Intersections between Art, Science and Culture (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 機械の目、コンピュータの目 自動化する映像についての試論
3. 学会等名 日本映像学会第46回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 Hideo Iwasaki	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 415
3. 書名 Circadian Rhythms in Bacteria and Microbiomes	

1. 著者名 Laurence Counihan; Lars C. Grabbe; Serhii Hryshkan; Patrick Rupert-Kruse; Akihisa Iwaki; Norbert M. Schmitz; Jens Schroeter; Martin Skrodzki; Christiane Wagner	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Buechner-Verlag	5. 総ページ数 239
3. 書名 Virtual Images: Trilogy of Synthetic Realities I	

1. 著者名 前川 修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 イメージのヴァナキュラー	

1. 著者名 勝又公仁彦、宮本隆司、青山勝、三木学、秋丸知貴、前川修、佐藤守弘、倉石信乃、生井英孝、小原真史、田中仁、タカザワケンジ他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎	5. 総ページ数 328
3. 書名 写真1 写真概論 (はじめて学ぶ芸術の教科書) 第5章を担当(87-100頁)	

1. 著者名 門林岳史、増田 展大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 287
3. 書名 クリティカル・ワード メディア論 (前川修、岩城寛久、松谷容作、水野勝仁、増田展大 執筆担当)	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典 (第6章 写真・映像 (487-542頁) を前川修、増田展大、松谷容作、岩城覚久担当)	

1. 著者名 加須屋 誠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 448
3. 書名 仏教説話画論集 下巻	

1. 著者名 伊藤俊治, 甲斐義明, 増田玲, 林田新, 菊田樹子, 竹内万里子, 長島確, 清水穰, 中村史子, 勝又公仁彦, gnck, 水野勝仁, 港千尋, 村山正碩, 廣瀬純(水野勝仁 執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎	5. 総ページ数 290
3. 書名 はじめて学ぶ芸術の教科書 写真2 現代写真 行為・イメージ・態度 (水野勝仁 219-233頁担当)	

1. 著者名 伊藤 守 (増田展大執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 402
3. 書名 ポストメディア・セオリーズ (増田展大 第11章 イメージの生態学 プラットフォームに生息するイメージ」259-281頁)	

1. 著者名 大橋完太郎、トーマス・ブルック（共編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 神戸大学出版会	5. 総ページ数 232
3. 書名 他者をめぐる人文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>本科研の論稿は以下のサイトに2023年度前半に公開予定である。 https://sites.google.com/view/interspaceart/home?authuser=0</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岩崎 秀雄 (Iwasaki Hideo) (00324393)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	
研究分担者	水野 勝仁 (Mizuno Masanori) (30626495)	甲南女子大学・文学部・准教授 (34507)	
研究分担者	大橋 完太郎 (Ohashi Kantaro) (40459285)	神戸大学・人文学研究科・准教授 (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加須屋 誠 (Kasuya Makoto) (60221876)	京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・客員研究員 (24301)	
研究分担者	松谷 容作 (Matsutani Yosaku) (60628478)	追手門学院大学・社会学部・教授 (34415)	
研究分担者	岩城 寛久 (Iwaki Akihisa) (60725076)	近畿大学・文芸学部・准教授 (34419)	
研究分担者	増田 展大 (Masuda Nobuhiro) (70726364)	九州大学・芸術工学研究院・講師 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関